名寄市立大学紀要　第５巻（2011）

原　著

看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージの変化（第１報）

―小児看護学領域学習前後の比較による学習効果の検討―

市　川　正　人*、細　野　恵　子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

【要旨】本研究の目的は、小児看護学領域の学習が看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージの形成に与える効果を明らかにし、より効果的な教育を展開するための基礎資料とすることである。調査は看護系大学生を対象に質問紙法にて実施した。質問項目は井上らが子ども観の測定に有効であるとした 51 組の形容詞対を参考に、独自に7段階の評価尺度を設け、その値を得点とした。得点が高い方を肯定的なイメージとしている。調査は小児看護学領域の学習の前後で実施し、Mann-Whitney の U 検定を用いて分析した。分析の結果、「強い―弱い」、「親切な―不親切な」など5項目で学習後の得点が有意に上昇した一方、「陽気な―陰気な」、「鋭い―鈍い」など5項目で得点が有意に下降していた。結果より、小児看護学領域の学習は、看護系大学生の乳幼児に対するイメージを具体化し、対象者の理解を深めるのに重要な効果を与えていることが示唆された。

キーワード：看護系大学生、乳幼児のイメージ、小児看護学、学習効果

Ⅰ．緒言

子どもに対するイメージは過去の体験や成育過程の影響を受け、子どもへの接し方や問題解決への取り組み方に影響するといわれている（市江 1997）。しかし近年、核家族化や少産・少子傾向の進行に伴い、学生が子どもと触れ合う機会が減少しており、学生のもつ乳幼児に対するイメージが乏しいのではないかと一般に言われている。このことは、看護系大学生においても同様の傾向が考えられる。そのため、小児看護学領域の学習が、乳幼児について学び、乳幼児と実際に触れ合う数少ない機会となっており、看護系大学生の乳幼児に対するイメージの形成に大きく影響していることが予測される。

看護系専門学校生や看護系短大生の乳幼児に対するイメージの調査は、実習や講義前後でのイメージの変化に関する研究（市江 1997、今辻ら 1997、草野ら 1997）が数多く報告されている他、過去の体験と乳幼児のイメージとの関連を調査した研究（高橋ら 1999、野村ら 2007）が報告されている。しかし、看護系大学生を対象とした調査は非常に少ない。3年課程と4年課程ではカリキュラムが異なるため、教育内容の違いが乳幼児に対するイメージの形成に影響を及ぼすことが考えられる。そのため、4年制大学において看護系大学生の乳幼児に対するイメージを把握することは、より効果的な小児看護領域の講義・演習・臨地実習を展開するにあたり有益な情報と成り得る。そこで本研究では、小児看護学領域の学習が看護系大学生の乳幼児の対するイメージの形成にどのような効果を与えているかを明らかにしたいと考えた。本報では小児看護学領域の学習前後での乳幼児に対するイメージを比較することにより、小児看護学領域の学習効果について検討したので報告する。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は、小児看護学領域の講義、演習および臨地実習が、看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージの形成にどのような効果を与えるのかを明らかにし、今後の効果的な教育を展開するための基礎資料とすることである。

2010 年 11 月 4 日受付：2011 年 1 月 28 日受理
*責任著者
住所　〒 096-8641　北海道名寄市西4条北8丁目1
E-mail：mai@nayoro.ac.jp

Ⅲ．研究方法

１．研究対象

A 大学看護学科学生 47 名を対象とした。

２．調査方法

1回目の調査は小児看護学領域の学習が始まっていない時期である、3年次の 2008 年4月に行った。その後小児看護学領域の講義、学内演習、幼稚園・保育所演習および病院実習を経て、2回目の調査を4年次の 2009 年 11 月に行った。調査は質問紙法にて行い、留置法にて回収した。

３．質問項目

質問項目は井上ら（1985）が子ども観の測定に有効であるとした 51 組の形容詞対を参考に独自に7段階の評価尺度を設け、その値を得点とした。各項目共に「明るい―暗い」など肯定的イメージと否定的イメージの組み合わせによる形容詞対となっている。いずれの項目も、7点が最も肯定的なイメージ、1点が最も否定的なイメージとし、その中間の得点を4点とした。

４．分析方法

1）回答傾向の把握

1回目・2回目それぞれの回答の傾向を把握するため、全項目の平均値および各項目の平均値を算出した。またそれぞれの質問項目ごとに得られた平均値を、中間得点の4点を基準に「4点以上の項目」および「4点未満の項目」に分類し、全項目中の割合を求めた。

2）小児看護学領域の学習前後の比較

小児看護学領域の学習前後の比較には、Mann-Whitney の U 検定を用いた（有意水準5％）。なお分析には SPSS 16.0J for Windows を使用した。

５．倫理的配慮

研究対象者には研究の趣旨を口頭および文書にて説明し、同意の得られた学生のみ回答を依頼した。研究協力への同意の確認は、質問紙の提出をもって同意があったとみなした。質問紙は無記名で、研究対象者個人が識別されないよう、連結不可能匿名化とした。また、本研究の実施に当たっては、名寄市立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅳ．結果

１．回収数および回収率

1回目の調査は、配付数 47、回収数 45、回収率 95.7％、有効回答率 100％であった。2回目の調査は、配付数 46、回収数 35、回収率 76.1％、有効回答率 100％であった。

２．全項目の回答の平均得点

1）全項目の平均得点

全項目の平均得点は、1回目 4.7、2回目 4.7 であった。

2）各項目の平均得点

各項目の平均得点は図1に示すとおりである。全 51 項目中、平均得点が4点以上の項目数は、1回目 38 項目（74.5％）、2回目 39 項目（76.5％）であった。また、平均得点が4点未満の項目数は、1回目 13 項目（25.5％）、2回目 12 項目（23.5％）であった。2回目の調査でイメージが否定的（4点未満）から肯定的（4点以上）に転じた形容詞対は「親切な」―「不親切な」、「きちんとした」―「だらしのない」、「思いやりのある」―「わがままな」、「まとまった」―「バラバラな」の4項目であった。一方、イメージが肯定的から否定的に転じた形容詞対は、「鋭い」―「鈍い」、「まじめな」―「ふまじめな」、「勇敢な」―「臆病な」の3項目であった。

3. 小児看護学領域の学習前後の比較

1）得点傾向に有意差のみられた項目

Mann-Whitney の U 検定を用いて中央値の比較をした結果、2回目の得点が有意に上昇した項目は「強い―弱い」、「親切な―不親切な」など5項目、有意に下降した項目は「陽気な―陰気な」、「鋭い―鈍い」など5項目であった（表1）。

Ⅴ．考察

全項目の平均得点は小児看護領域の学習前後で変化が見られず、また各項目の平均得点も4点以上の項目は学習前・後とも7割以上であり、全体的には乳幼児に対し肯定的イメージを保つ学生が多いことが示唆された。一方で、各項目の得点の変動に着目すると、全体の約1割にあたる5項目で得点が有意に上昇し、また同数の5項目で得点が有意に下降する結果が得られた。この結果より、看護系大学生は小児看護学領域の学習を経て、乳幼児に対するイメージを肯定・否定の双方向に広げ、より具体化していることが示唆された。このことは短大生を対象とした先行研究（上山 1999）でも同様の傾向が示されている。

乳幼児に対するイメージが肯定・否定双方に広がった要因として、幼稚園・保育所演習と病院実習を経て、あらゆる健康レベルの小児と接した経験が影響したと考えられる。例えば、2回目の得点が有意に上昇した「強い―弱い」、「まとまった―バラバ

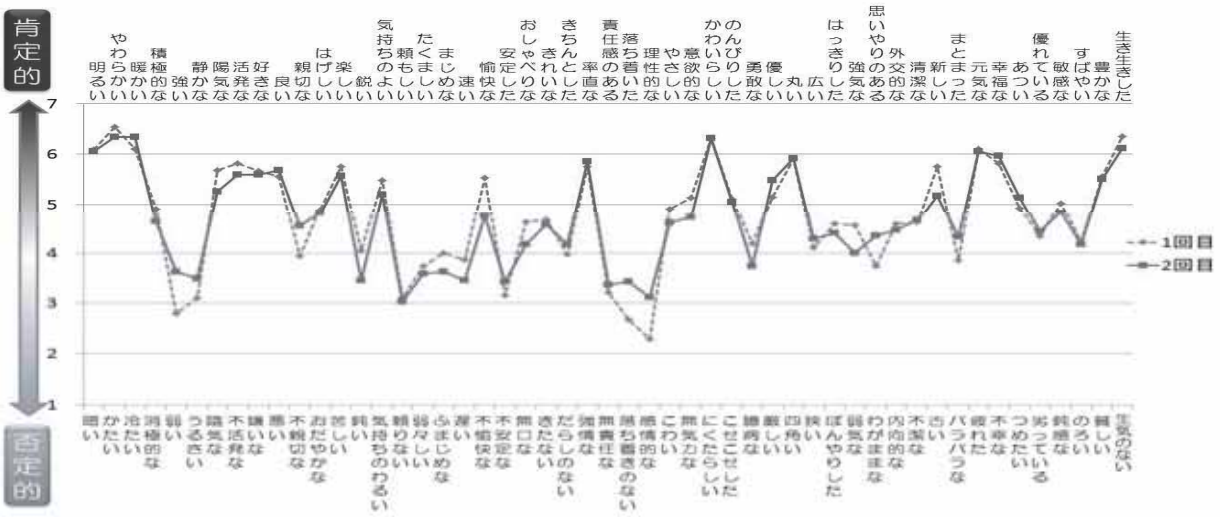

図１　看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージを表す形容詞 51 対の平均値

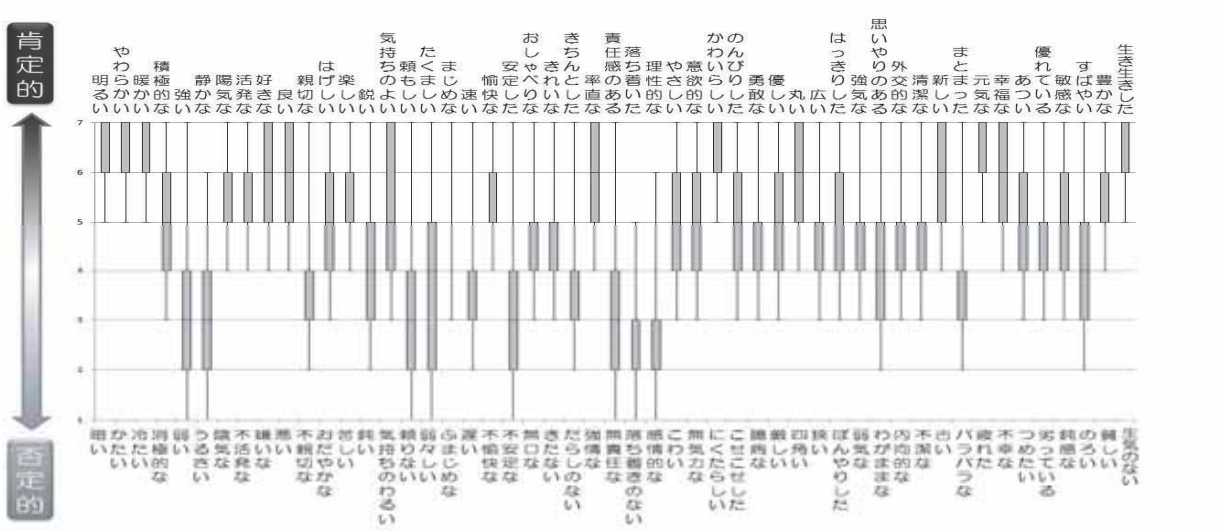

図２　各項目の得点分布（１回目）

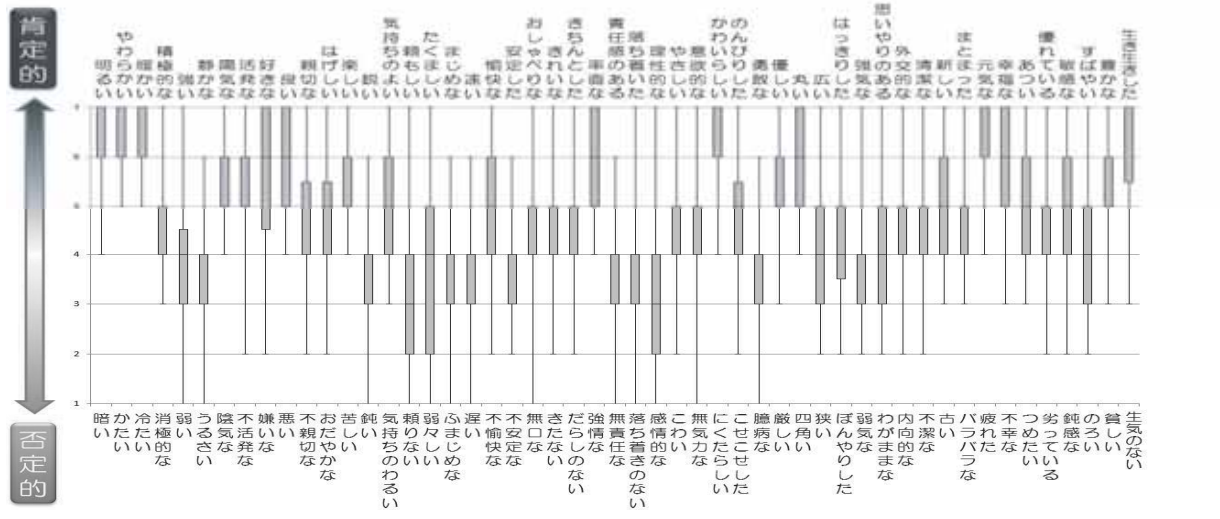

図３　各項目の得点分布（２回目）

表１　小児看護学領域の学習前後の調査で有意差のみられた形容詞対

2回目の得点が有意に上昇した項目	2回目の得点が有意に下降した項目
「強い―弱い」（p = 0.008）	「陽気な―陰気な」（p = 0.026）
「親切な―不親切な」（p = 0.047）	「鋭い―鈍い」（p = 0.047）
「落ち着いた―落ち着きのない」（p = 0.002）	「愉快な―不愉快な」（p = 0.005）
「理性的な―感情的な」（p = 0.005）	「強気な―弱気な」（p = 0.016）
「まとまった―バラバラな」（p = 0.034）	「新しい―古い」（p = 0.025）

Mann-Whitney U 検定

ラな」などは、幼稚園等で元気に生活する乳幼児と接することによりイメージが変容したと考えられる。一方で、2回目の得点が有意に下降した「鋭い―鈍い」、「強気な―弱気な」などは、臨床実習において急性期の病児と接したことによってイメージが変容したことが一因と考えられる。このように、乳幼児は体調の変化により機嫌や活気が大きく左右されるため、それに伴い学生に与えるイメージも多様に変容することが考えられる。そのため、あらゆる健康レベルの乳幼児に接することにより、様々なイメージを得ることとなり、結果として乳幼児に対するイメージが肯定・否定の双方向に広がったと思われる。一般に学生が子どもと触れ合う機会は減少していると言われており、今まで子どもと接する機会のなかった学生は、小児看護領域の学習前の乳幼児に対するイメージは、想像によるところが大きかったと考えられる。しかし、小児看護学領域の学習により知識や技術を習得し、看護系大学生全員が乳幼児と接することによって、漠然としていた乳幼児に対するイメージを変容させたことが示唆された。

乳幼児に対するイメージを広げたもう一つの要因として、小児看護学領域以外の学習も影響していると考えられる。看護学科では、あらゆるライフステージにおける「ひと」を対象とし、学習する。そのため、乳幼児以外の対象に対する学習が、乳幼児の相対的なイメージの形成に影響していることが考えられる。2回目の調査の時点で、学生は全ての領域の実習を終えている。よって、他領域での様々な年齢や健康レベルの対象者と接し、学んだ経験が、乳幼児のイメージをより豊かなものにしていることが推測される。

以上のことより、小児看護学領域の学習は、看護系大学生の乳幼児に対するイメージを肯定・否定の双方に広げることで、対象者の理解を深めるのに重要な効果を与えていることが示唆された。一方、本研究の限界として、対象となる学生への倫理的配慮により、連結不可能匿名化としてデータを収集したため、学習前後のより詳細な比較はなされていない。また本研究では、講義や演習、実習のそれぞれの学習効果や、これまでの成育環境、過去の体験等と、乳幼児に対するイメージとの関連性については検討していない。今後はどのような要因が乳幼児に対するイメージの形成に効果を与えているのか詳細に検討するとともに、あらゆる年齢、健康レベルの対象者の理解がより一層深まるよう、看護系大学における教育内容を模索していく必要があると考える。

Ⅵ．結語

看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージは、小児看護学領域の学習効果により、肯定・否定の双方向に広がることが示唆された。小児看護学領域の学習においては、特に乳幼児との接触体験がイメージの形成に重要であることが考えられる。そのため、幼稚園・保育所演習や病院での臨地実習において学生が積極的に乳幼児と接し、関心を向け、乳幼児に対するイメージをより豊かなものにできるよう、教育に反映させていきたいと考える。

文　献

市江和子（1997）小児看護学において看護学生が子どもに対してもつイメージの変化－小児看護学学習の前後におけるイメージ形成要因－．第28回日本看護学会集録（看護教育）, 140-142.

市江和子（2001）看護学生の子どもに対するイメージに関する研究（その1）－看護学生と保育学生の比較－．日本看護研究学会雑誌 **24**, 391.

市川正人，細野恵子，上野美代子（2009）看護系学生と他学科学生の乳幼児に対するイメージの比較．名寄市立大学紀要 **3**, 87-92.

井上正明，小林利宣（1985）評価技法としての SD 法の意義とその用い方（その2）－形容詞対の尺度構成の方法－．指導と評価 **31**, 41-44.

今辻由香里，山下千波，中嶋恵美子（1997）3年過程看護学生の小児看護学講義終了後の学び．第36回日本看護学会集録（小児看護）, 321-323.

上山和子（1999）看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について．新見公立短期大学紀要 **20**, 125-133.

木村留美子（1992）子ども観の研究（1）－ SD 法による短期大学生の子どものイメージについて－．日本看護科学会誌 **12**, 50-56.

草野美根子，寺田敦子，今福ひとみ，福池ゆかり，杉本暁子，大久保薫，酒見敬子，中淑子，内海滉（1997）小児看護実習における看護学生の子どもに対するイメージの変容－病棟実習と保育所実習の因子分析的検討－．第 28 回日本看護学会集録（看護教育）, 143-145.

高橋紀子，内海滉（1999）看護学生の子ども時代の自己像と看護学生の子どもに対するイメージとの関連．日本看護研究学会雑誌 **22**, 204.

野村幸子，河上智香，長谷典子，藤原千恵子（2007）子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ．県立広島大学保健福祉学部誌 **7**, 169-180.

細野恵子，上野美代子（2008）小児看護実習後の看護学生の乳幼児に対するイメージ．市立名寄短期大学紀要 **41**, 25-31.

細野恵子，市川正人，上野美代子（2009）看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージの比較．名寄市立大学紀要 **3**, 79-86.

Bulletin of Nayoro City University 5: 21-26 (2011)

Original Paper

Changes in the perception of infants among university nursing students (1)

- Before and after pediatric nursing training -

Masato ICHIKAWA *, Keiko HOSONO

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

Abstract: The purpose of the present study is to clarify the effect of pediatric nursing training on the formation of university nursing students' perception of infants and to obtain fundamental data for the development of more effective instruction. A survey of university nursing students was carried out using a questionnaire comprised of Inoue et al.'s 51 pairs of adjective opposites determined to be effective in measuring attitudes toward children. Each paired item was placed on a seven-point scale with higher values representing a more positive image. The questionnaire was administered once before and once after the training period and results were analyzed using a Mann-Whitney test. Analysis revealed that 5 pair items such as strong-weak and kind-unkind obtained significantly higher scores after the training period, while another 5 pair items such as cheerful-gloomy and quick-witted – dull scored significantly lower. Results suggest that pediatric nursing training contributes to a more concrete image of infants among university nursing students and provides the important effect of deepening objective understanding.

Key words: university nursing students, perception of infants, pediatric nursing, learning effect

---

Received November 4, 2010; Accepted January 28, 2011
* Corresponding author (E-mail: mai@nayoro.ac.jp)